

実 践 報 告

主題科目「平和と人権」の授業実践

土屋 武志

要 約

本稿は、愛知教育大学のカリキュラム改革の一端として実施されている教養教育の改革に関して、主題科目「平和と人権」の概要を報告するものである。1年次から3年次にわたる4セメスターを一貫したテーマで追求する「主題科目」は、教養教育の新しいタイプであり、有効性の検証が必要とされている。「平和と人権」では、入門講座時点からグループ研究活動を取り入れ、また、外部講師による特別授業を実施するなどカリキュラム開発を行っている。その現状報告である。

キーワード：平和と人権，教養教育，主題科目

1. 本稿の目的

愛知教育大学が2000年よりはじめた教養教育改革の中で「平和と人権」というテーマが共通科目の主題科目の一つとして設定された。このテーマにもとづく第2セメスターから第5セメスターまでのカリキュラムの開発と実践が課題となっている。2000年度入学者から学年進行で行われているこのカリキュラム改革は、2002年度に一応の完成を見る。しかしながら、この改革は従来の教養教育を大きく見直して行われているいわば実験的な側面も持つものであるので、その有効性に関する評価とそれにもとづく検討は2002年度以降の大きな課題となると考えられる。そこで、本稿では、その基礎資料の一つとすべく現在行っている主題科目「平和と人権」の概要を報告するものである。

2. 担当教官の構成

2001年度にこの柱を担当した教官は以下の16名

(うち非常勤講師3名)である。

子安潤(学校教育)・藤井啓之(学校教育)・山口匡(学校教育)・有働裕(国語教育)・船尾日出志(社会科教育)・目黒克彦(社会科教育)・土屋武志(社会科教育)・松田京子(社会科教育)・魚住忠久(社会科教育)・見崎恵子(社会科教育)・金森正臣(理科教育)・松田正久(理科教育)・南守夫(外国語教育)・小出隆司(非常勤講師)・三輪昭子(非常勤講師)・大橋秀子(非常勤講師)

非常勤講師3名を除く13名は愛知教育大学の専任教官であり、後述するように受講者の研究アドバイザーとしてある程度責任ある学生指導を受け持つ。

3. 「平和と人権入門」の実践

「平和と人権入門」は第2セメスターに設定された主に1学年向けの授業である。「平和と人権」を選択した約120名の学生が最初に受講する授業

であり、第3・4セメスターの「平和と人権展開」、第5セメスターの「平和と人権セミナー」の入門講座として重要な意味を持っている。

3クラスに分けられたこの授業は、基本的に3クラスとも同じ授業となるよう以下のような同一のカリキュラムを設定した。

「平和と人権入門」のシラバス（各1時間）

- ①グループ分け
- ②ビデオレポート
- ③グループテーマ決定
- ④グループ別ゼミ1
- ⑤グループ別ゼミ2
- ⑥グループ別ゼミ3
- ⑦講義1
- ⑧講義2
- ⑨講義3
- ⑩特別授業（2時間扱い）
- ⑪研究発表会（2時間扱い）

上記の授業の概要を主な活動ごとに示せば以下のようなものである。

第1・2時 グループ分け

コーディネーターが指示して学籍番号順にグループ分けをする（1班6名）。グループでの協調性を育成するため自己紹介ゲームを行う。そのあとコーディネーターが授業のガイダンスとビデオ資料の紹介と次時までの課題を指示する。

第2時までの課題

2時まで以下に以下のビデオリストの中から最低2本を探して視聴させる。視聴したビデオのなかからグループ別研究のテーマを考え、レポート用紙に理由を書く。研究テーマは「平和と人権」というキーワードに関わるもの。

ビデオリスト

- ①スティーブン・スピルバーク監督「アミスタッド」(1998)

- ②ナディア・タス監督「エイミー」(1997)

- ③ピーター・ウイアー監督「いまを生きる」(1989)

- ④クロード・ベリ監督「ジェルミナル」(1993)

- ⑤チャールズ・チャップリン監督「独裁者」(1940)

- ⑥トム・シャドヤック監督「パッチアダムス」(1998)

- ⑦ウィリアム・フリードキン監督「真実の英雄」(2000)

- ⑧マジッド・マジディ監督「太陽は、ぼくの瞳」(1999)

この活動は、ビデオを複数本鑑賞させることを重要な要素としている。それぞれのビデオ作品は時代背景やテーマが違うものである。しかし、その異なるものから受講者自身が共通性や異質性を読みとり、自らの意見を導くことこそ科学的研究のスタートラインとして適切な活動と考えられる。一つの作品や主張を無批判に受容するのではなく、複数のものを比較し違いや同質性を考察したうえで自らが考えるべきテーマを導き出すことこそ自己責任に裏打ちされた主体性ある研究姿勢を育てると考えられる。

第3～6時 グループ別研究

この期間は、視聴したビデオから考えたグループ研究テーマを各自提案させ、グループで協議させて一つのグループテーマを決定させることから始まる。はじめは、順に感想を報告することから初めさせてもよい。最終的に何について調べて報告したいのかをグループ単位でテーマを明確にさせる。

その際、専任教官の中から各グループに一人の研究アドバイザーをおいて受講者の教育にあたることとした。なお、2001年度は、この柱に所属する専任教官が少ないため一人で複数（4グループ程度）を担当した。また、アドバイザー担当の教

官は、今年度展開講座を担当しない教官とした。各グループは、グループテーマの決定からその具体的調査方法についてアドバイザー教官との打ち合わせのもとにグループ研究を進めた。

第7～9時 講義

この期間は、非常勤講師による講義を実施した。2001年度は、小出隆司氏の「ぞう列車を伝えて」という3回の講義である。氏は、学校教育と市民活動の双方において平和教育を進めてきた実践的研究者である。戦争と平和に関わる歴史事象をインタビュー調査等の手法で発掘し人々に伝承した経験を踏まえた講義は、グループ研究を進める受講者への有効なアドバイスともなる。

第10時 特別授業

この時間は、3クラス合同で外部講師による特別授業を実施した。2001年度のプログラムは以下の通りである。

12月19日（水）実施

会場：大学会館大集会室

- 13:30 インタロダクション1
- 13:35 講義：韓国人にとっての植民地時代（名古屋大学外国人研究員 金光旭）
- 14:05 インタロダクション2
- 14:10 公演：一人芝居『悔悟の記録』（劇団なんじゃもんじゃ 西尾瞬三）
- 15:20 休憩
- 15:40 インタビュー：「悔悟の記録を演じてー西尾氏との対話ー」
- 16:10 インタロダクション3
「地雷廃絶を訴えて」
（附属岡崎中学校2年 柴田知佐）
- 16:20 講義と公演『ぞう列車を伝えて』（小出隆司）
- 17:00 終了

西尾氏は『ある憲兵の記録』（朝日文庫）をもとに大日本帝国時代の満州における日本軍憲兵の証言を一人芝居として演じる演劇人である。氏の実際の演技とそれを演じた経験から考えたことなどを語った。

小出氏は、地雷廃絶を訴えて活動している柴田知佐さんを紹介するとともに愛知教育大学でサークル活動としてぞう列車合唱を行っている学生たちと実際に歌の紹介を行った。

この特別授業は、平和や人権に関する問題を私たち一人一人がどのように考えそしてその考えをどのようにして人に伝えていくべきかを考えるためのものである。

私たちは一人で生きているのではなく社会の中でさまざまな思想や文化を持つ人々と共に生きている。そのような社会で、自分自身の思想をつくることと同時にそれを共に伝えあい理解し合うプロセスが重要になる。この「平和と人権」の授業では、平和や人権に関する知識を単に豊富にするだけでなく、受講者同士が意見を出し合い、考えを深めることを重視しているのもこのような社会観を背景としている。

司会進行や音響・照明等の実際の運営は、グループ代表を中心に受講者のボランティアで行った。西尾氏へのインタビューや質疑応答は司会者と受講者の自発的な発言により意味深いものとなった。この特別授業に関する実践記録は、学長裁量経費による研究プロジェクトの報告に併せて別稿として報告する。それをもとに、この授業の有効性については本誌上においても今後改めて報告する予定である。

第11時 研究発表会

本稿の作成時点では、2001年度の研究発表会はまだ実施されていないが、2月6日（水）にグループ別研究の報告会を開催する。これは、受講者による企画・運営委員会が実施するものではある

が成績評価のうえで重要な要素となる時間である。

なお、この授業の評価は講義担当の小出氏とグループ別研究担当のアドバイザー教官による合議で行うが、その際の資料となるのがこの発表会とグループ別レポート及び個人レポートである。

グループレポート及び個人レポートは以下のような書式である。

グループレポート

ワード形式で10ポイント40字×30行でA4サイズ。枚数は4～8枚。図や写真、イラスト等は文書中に張り付ける。1枚目は、タイトルに5行分とる。タイトルは15ポイント。最後のページに、グループ名とメンバーの氏名を入れてる。提出は、2月13日までにコーディネーターのメールアドレスに添付ファイルにて。

個人レポート

特別授業を受けての意見・感想・考えたことなど自由に論じる。

ワード形式で10ポイント40×30行でA4サイズ1枚。タイトルは3行分とり、15ポイント。感情的でなく論理的に書く。最終行に学籍番号・所属・氏名を記入。提出日は1月23日。プリントアウトしたものと3.5インチフロッピーに保存したものと両方提出。ファイル名は学籍番号と氏名です。グループで1枚のフロッピーに収めて提出してもよい。特別授業を受講しなかった学生は、『ある憲兵の記録』（朝日文庫）を読み、それをもとに論じる。

このレポートもレポート集として別稿にまとめられる予定であり、それをもとに本誌上にて改めて報告する。

以上が、「平和と人権入門」の概要である。

4. 「平和と人権展開」の実践

「平和と人権」の展開講座は、以下のテーマによる演習を加味した講義によって実施された。

- ① 「戦争論」から現代を生きる私たちを読みひらく
担当者：藤井啓之
- ② 地域の歴史から平和を考える
担当者：松田京子
- ③ 日中十五戦争の探索
担当者：目黒克彦
- ④ 子どもと「平和」を考える
担当者：小出隆司
- ⑤ 戦争の記憶のあり方
担当者：南守夫
- ⑥ 女性と人権
担当者：大橋秀子
- ⑦ 子供と平和を考える
担当者：小出隆司
- ⑧ 人権を考える
担当者：三輪昭子
- ⑨ 子ども・人権・教育
担当者：藤井啓之

これら展開講座は、1年次に入門講座を受講した学生を対象に入門講座を踏まえて展開されるものであり、単なる講義ではなく、受講者相互のディスカッションやフィールドワークなどを伴うものである。

例えば、松田京子氏の「地域の歴史から平和を考える」は、豊川海軍工廠跡をフィールドワークするプログラムが用意され、藤井啓之氏の「子ども・人権・教育」「戦争論」から現代を生きる私たちを読みひらく」は、特攻隊、従軍慰安婦、南京大虐殺、戦争は政策か？、東京裁判、教科書問題、日本人のアイデンティティ、Webでの小林への賛否両論の分析、という8つのグループに分かれて調査研究し、報告と討論が行われた。この授業

では、メーリングリストを使った受講者相互の情報交換も活発に行われた。

他のテーマにおいても、発表と討論を取り入れた授業展開がなされた。

5. 「平和と人権セミナー」の企画

「平和と人権セミナー」は、2002年度からスタートする3年生前期向けの授業である。この授業については、教官一人に20名の受講者としてゼミ形式で授業を行うことが担当教官間で確認されている。1コマの時間内で2名の個人報告が予定されている。1年次の入門に始まり2年次の展開をうけて、共通科目「平和と人権」のまとめ的な授業となるが、最終的に受講者個人の見方や考え方が理論的かつ主体的に形成され、それを他者に共感されるように伝達する能力を持たせるための授業が実践されなければならないであろう。

本稿を書いている段階では、まだその具体像は報告できないが、今後、3年間を通して設計した主題科目の有効性を検証する上でも本誌上で実践状況を報告したい。

6. 主題科目の効果的実践のための条件

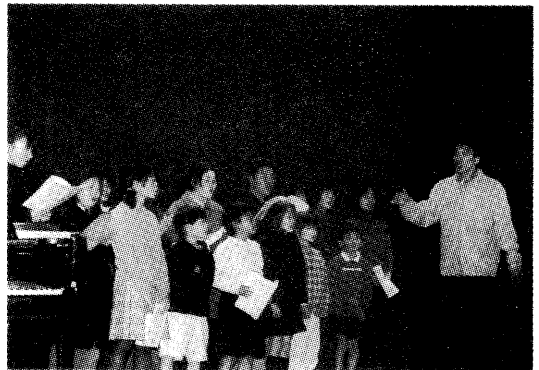
主題科目は、第2～第5セメスターを連続させた一貫性のあるカリキュラムをその特色としている。これを効果的に実践するためには、『愛知教育大学年次報告2000』も指摘するように、「全ての教員が個人レベルの創意工夫に留まることなく、教員集団としてどう教育研究を推進して行くか」ということにある。(2001年6月発行、p170)

そのために、「平和と人権」では、受講者向けの共通資料集『共通科目「平和と人権」の学び方―受講の手引き第1版―』(2001年4月発行)を作成することによって、この主題科目についての受講者の理解を深めると同時に担当教官間の共通理

解も深めることにした。この経費は、教養教育特別プロジェクト経費を利用したが、このように予算的な条件整備も必要なことである。大学改革に伴う今回の教養教育改革において教養教育に関する予算的裏づけが明確となり(『愛知教育大学自己点検・評価報告書2000年度』2001年6月発行、p16)、先の受講手引書が作成可能となったり、特別授業の講師謝金が準備されたりしたことは、重要な条件整備であったと考えられる。

特に特別授業は、この主題科目を選択した学生全員を集めて、かつそれら学生によって実質的な運営を行ったことによって、ともすれば大学教育への失望感を感じることが危惧される1年次学生に対して、教養教育としての主題科目を主体的・自覚的に学ぶ意欲を高めることにつながったと考えられる。

このような点に関しては、受講者による感想やレポート等をまとめて展開講座の実施状況も含めて稿を改めて報告したい。



「平和と人権入門」特別授業の様子

「ぞう列車合唱団」による実演

(つちや たけし／社会科教育講座)